

《紀行》

木喰仏悲母三十三観音に記された宝珠

—改刻の痕跡—

武庫川女子大学准教授 生活美学研究所研究員 藤井 達 矢

1. はじめに

平成30年(2018年)は木喰上人生誕300年にあたる。故郷山梨県南巨摩郡身延町のなかとみ現代工芸美術館では「生誕三百年木喰展」が開催され、NHKの日曜美術館でも特集が組まれるなど、柳宗悦の熱心な研究によって世に出されて以来90年余りの今、改めて「微笑仏」のブームともいえる状況にある。

真言密教を礎とした上人が、権威と決別しあくまでも庶民に寄り添う道を選んだ結果、宗派にこだわらず、庶民の抜苦与楽のために「微笑仏」という境地に至った。そこに見られる微笑には、儀軌に縛られない柔軟な発想の昇華があって、昨今の地域社会の中に入り込むアーティストの姿とも重なる。社会が抱える問題、社会課題は今も昔も根底で通じるものであり、そうした側面から惹かれた筆者は、数年来木喰仏研究および美術家として美術表現にも取り組んでいる。

平成29年12月初めの5日間、筆者は新潟を訪れた。本場越後路での、初めての木喰仏との対面であった。長岡市(寶生寺・上前島金毘羅堂・真福寺)、柏崎市(安住寺・大泉寺・安蔵田観音堂)、上越市(大安寺)、小千谷市(小栗山木喰観音堂)において撮影・調査を行った。既存の木喰仏研究には造形上の論考がないに等しく、耽美的で曖昧な触れ方にとどまっている。美術家としての視点を踏まえて明らかにすべく、本稿では後に改刻されたとされる観音群像について検討した。

2. 後世に手が加えられた木喰仏

庶民の暮らしに寄り添う木喰仏であるが故に地域の子どもの遊具となり顔面の判別ができないものがあつたり、住民が彩色を施したり、後世の仏師が住民の願いから改刻を行ったりと、原形をとどめないものも少なくない。真蔵院の十二観音や大泉寺の子安地藏菩薩^{図1}もそうであるが、大々的に「改刻」された例が同じく新潟県にある。

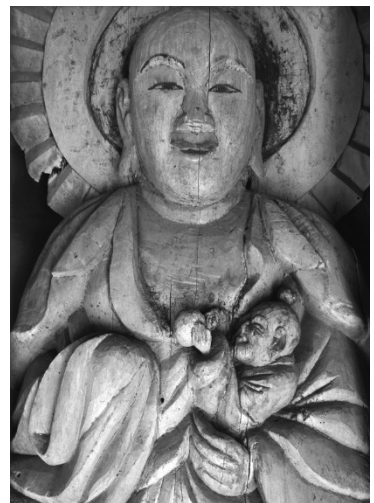


図1 顔面が改刻された「子安地藏菩薩」(大泉寺／新潟県柏崎市)
筆者撮影

それは、安住寺の悲母三十三観音^{図2)}群像（1804年作）である。1カ所に30体以上を集めているのは全国で4カ所だけであり、その全てが新潟県内にある。そしてこのものが最後の群像であるが、馬頭観音一体を除いて他の全ての顔部分が明治初期に改刻されてしまっているのは周知の事実である。

非常に残念ではあるが、地域住民の発願そして寄進によって当時の仏師に依頼されたわけで、木喰仏の懐の深さを以ってすれば、この形で大切に祀られてきたことも、それはそれであるべき姿なのであろうと理解できる。

今回は特に、安住寺と同年の1804年に制作されたままオリジナルの状態とされる寶生寺（長岡市）の三十三観音^{図3)}群像と比較しながら、改刻の程度を検討した。五来重がこの群像を見て「微笑佛（みしょうぶつ）」と呼んだが、木喰上人円熟期の独特の微笑が存分に表現されており、永年の線香に燻された飴色の肌に改刻の痕跡は見られない。比較対象として最適の群像である。



図2 改刻された「悲母三十三観音」群像（安住寺／新潟県柏崎市） 筆者撮影



図3 オリジナル状態の「三十三観音」群像（寶生寺／新潟県長岡市）
※右下の一体は盗難に遭い模刻像 筆者撮影

3. 微笑のない顔

端正な面々の中に馬頭観音だけが異彩を放っている光景は、ある意味貴重であり、木喰仏の本質的な意味を、その微笑に惑わされることなく再認識させてくれる。それは、顔が改刻されたという32体と、唯一改刻がないとされる馬頭観音とのコントラストが成せる技である。しかしそのうちに、妙な共通点があることに気が付いた。それは「宝珠」が額に刻まれた像や墨書きされたものが複数見られる点である^{図4,5}。これらは宝冠を表現していると思われるが、中には化仏を描いてあるものや他の文様もある。宝珠を大切に扱う真言密教を礎にしている木喰上人がこれらを描いていた確証があるならば、腑に落ちよう。しかし他所に遺した観音像には一切、そのような例がないために、違和感しか覚えない。

一般的に観音像の宝冠に宝珠が配されることは多々あるが、基本的に木喰上人は、千手観音・十一面観音・馬頭観音以外の如意輪観音・准胝観音・聖観音・白衣観音などの頭部は、頭巾の形態のみで表現している^{図6}。顔の造形が全く違うというインパクトが強烈であるために、頭部までも注視されにくかったためか、この点に関する論述をほとんど見かけない。



図4 改刻された「悲母三十三観音」(安住寺／新潟県柏崎市)、
左から「第七番 如意輪観音」「第八番 聖観音」「第十三番 聖観音」 筆者撮影



図5 改刻された「悲母三十三観音」(安住寺／新潟県柏崎市)、
左から「第十五番 白衣観音」「第二十一番 准胝観音」「第二十八番 白衣観音」 筆者撮影



図6 左:改刻された「第七番 如意輪観音」(安住寺/新潟県柏崎市)、
 右:オリジナル状態の「如意輪観音」(寶生寺/新潟県長岡市)、
 木喰上人は十一面観音など一部を除き右のような頭巾で表現 筆者撮影

4. 頭部も改刻

筆者はこの観音像の多くが、上に長く伸びていた頭巾部分を同じ仏師によって削られ、宝冠と新たな顔をバランスよく配するために刻まれたと考える。それは、光背の上端の高さに対する顔・頭部のアンバランスさからも窺える。頭巾部分も改刻されたと捉える一つの根拠となるのが、新しい顔にはみ出た墨である^{図7}。恐らくこの仏師は、新たに削った頭部とのつじつまを合わせるために、頭巾部分に墨を塗ったのであろう。またその墨色が、新しい顔と胴をなんとかつなぎ合わせる役割も果たす。それと同時に、細筆で宝珠や化仏を宝冠に描きこんだのであろう。つまり、新しく刻み出された顔に墨を付着させることが出来たのは木喰上人ではなく、この仏師しか考えられないのである。もっとも、さらに後世に他の誰かが着色した可能性も否定できないが、これだけまとまった量の観音像に一貫した筆致で描いたり、繊細に刻んだりしている点からも、同一人物と考えて然るべきである。背銘にある墨と頭巾にある墨の成分分析(膠に含まれるコラーゲンの検出によって分析が可能との研究発表が、奈良女子大学と奈良文化財研究所のチームによって2012年に行われ、さらに2014年には「質量分析法による平城京跡出土の墨に残存するウシ膠コラーゲンの同定」として成果が発表されている)を行えば、少なからず状況を解明できるのではないか。

さらに光背の梵字や頭巾の周囲の状態から、明らかに頭部を削った痕跡が見える。本来頭巾が光背と接していた部分は削り取られ、頭巾を避けて書かれていた梵字が残されている^{図8,9}。これは頭部の改刻がなされたことの証拠に他ならない。



図7 改刻された「第九番 聖観音」部分、額にはみ出した墨(安住寺／新潟県柏崎市) 筆者撮影



図8 改刻された「第二十二番 白衣観音」部分、光背に削った痕跡(安住寺／新潟県柏崎市)

筆者撮影



図9 改刻された「第十五番 白衣観音」部分、光背に削った痕跡(安住寺／新潟県柏崎市)

筆者撮影

5. 馬頭観音の宝珠

唯一木喰上人オリジナルと言われる馬頭観音^{図10}であるが、他の観音像と同様に頭部に宝珠が刻まれている。しかしこの宝珠の違和感について、既に『木喰一原田康次写真集』(1981年)の中で次のように指摘されている。

厚化粧の仏たちとまったく同じ意図で彫り直して(顔のみ)ある。馬鹿もここまできると、見事というより壮観さに打たれる。若い住職さんの好意で最上段から重い馬頭観音を降ろしてくれた。顔の彫り直しは比較的軽度だったが、

低俗な三蓋松風の宝珠が彫り起こされ、チョンチョロ鬚が画かれている。なにが仏作仏業かと言いたくなる^{注1)} [()内も含み原文ママ]。

このように原田は憤慨している。「厚化粧の仏」とは同じく新潟県内の大崎観音堂の群像であったが、地域住民の意思に反して昭和に入ってから旅の僧に着色されたとか大正時代に何者かが着色したなど諸説ある。そしてこれらは2007年の中越沖地震を機に、柏崎市の真蔵院に移されている。ここの像も引き合いに出しながらその変容ぶりを嘆いた原田だったが、安住寺の群像について、馬頭観音以外の像の頭部については特に気に留めていない。

この馬頭観音を寶生寺^{図11)}と小栗山観音堂^{図12)}のそれと比較しても、やはり宝冠や宝珠は浮いている。彫りが深く躍動的な顔面・髪そして馬頭に、薄っぺらく安っぽい宝冠・宝珠は、どう見ても木喰上人の作仏ポリシーに反する。この額の位置には、中央の馬頭から左右に自然に流れる髪があったと考えるのが自然であろう。



図10 軽微ながら改刻された「第二十九番 馬頭観音」部分、額上部に不自然な三弁宝珠(安住寺／新潟県柏崎市) 筆者撮影



図11 オリジナル状態の「馬頭観音」部分(寶生寺／新潟県長岡市)

筆者撮影



図12 オリジナル状態の「馬頭観音」部分(小栗山観音堂／新潟県小千谷市)

筆者撮影

6. おわりに

安住寺（新潟県柏崎市）の悲母三十三観音群像について、馬頭観音だけは改刻されておらず、他の 32 体は顔が改刻されていると言われてきた。しかし、それを超える改刻が施されていたと考えられる。馬頭観音は額上部の髪が宝珠を意匠とした宝冠に改刻された上に墨で文様を描き込まれている。さらに、千手観音・十一面観音など既に頭に複数の顔面を持つ観音像以外のほとんどが、顔のみならず頭巾部分が改刻され、墨も入れられ、特に宝珠を意匠とした宝冠を戴冠する姿へと変容していた。

美術品としてこれらの改刻された木喰仏を捉えれば、評価に値しないということになってしまう。柳も原田も一様に落胆しているのだが、木喰上人はそれを笑い飛ばすのではなかろうか。自らの修行として全国を巡り、庶民に寄り添い、庶民の苦を除き、庶民に安らぎを与えるべく、そのシンボルとして 1000 体以上の仏像を彫った。各地に遺された木喰仏は長きにわたって地域の人々に愛された。その過程で、地域住民の意思で寄進を募って改刻されたのが悲母三十三観音群像なのである。これは記録に残っている事実であり、決して心無い仏師が勝手に彫ったのではない。後世にわたり大切に守っていきたいという思いが改刻に結び付いたとしても、それを責めるわけにはいかない。国宝の仏像のように近寄りがたい存在ではなく、例え朽ち果てようとも庶民の中にいつでもいる木喰仏の在り様こそ、木喰上人が望んだものであったはずである。

限られた時間での調査であり、さらに精緻な調査と分析が必要である。初見で感じた違和感、それは美術家としての勘に頼るところが大きいのだが、特に頭部周辺にいくつかの客観的裏付けとなる形態を確認できた。オリジナルではない像が本来の木喰仏の姿を明瞭に示してくれる切り口になると考えている。さらに調査を重ね、先に述べた墨や 3D スキャンなど多角的な分析方法を用い、改刻の詳細を明確にすべく準備をしている。

【注】

1) 原田康次 1981 『木喰』木耳社, p173

【参考文献】

大久保憲次・小島梯次 2008 『木喰 庶民信仰の微笑仏』東方出版

山梨日日新聞社 1986 『木喰の旅』山梨日日新聞社

日本民芸協会 1972 『木喰上人 新装・柳宗悦選集 9』春秋社

柳宗悦 1981 『柳宗悦全集著作編第七巻』筑摩書房

浜松市博物館 2016 『浜松市博物館特別展 遠江の木喰仏 図録』浜松市博物館

深草俊輔・河原一樹・小池伸彦・舘野和己・中沢隆 2014 「質量分析法による平城京跡出土の墨に残存するウシ膠コラーゲンの同定」『古代学』第 6 号, 奈良女子大学古代学学術研究センター, pp. 35-39